

#### ・下に見られると不愉快になる

いったい、なんのために自尊心なんてものがあるのかね、と思うのである。普段は何も考えていないのに、国をバカにされるととたんに愛国心が、会社をバカにされると愛社心が、家族をバカにされると家族愛が出てき、職業をバカにされ、出身校をバカにされ、趣味をバカにされ、鼻肩チームをバカにされると、自分自身が否定されたかのように感じて、腹が立つのである。他人が自分より下に見えるとうれしくなり、下に見られるととたんに不愉快になるのである。

#### ・人のふり見て思うこと

中年男がポロシャツの襟を立てていると、「なんのアピールやねん」的な反感をもったり（最近はどうも無視しているが）、秋葉原アイドル親衛隊のヲタ芸を見たりすると、いい年をして何やってんだ、とあきれかえったり、六十歳前後のおばさんたちがいまだに、ペ・ヨンジュンを迎えに大挙して成田空港に殺到し、二日前からここで待っているのよ、と得意顔に話しているのを見たりすると、フーテンの寅さんを真似て、「よお、相変わらずバカか」といいたくなるのである。

#### ・電車で足を踏まれる

電車が揺れて足を

踏まれたのなら、痛いけどまだ我慢することはできる。過失だからである。だが、踏んだ人間は謝らなければならない。たとえ過失であっても、自分の足が踏んだのだから。当たり前のことである。

ところが、これが当たり前でないと思う人間が出てきた。自分が踏んだのに、平然としているのである。おまえが踏んだのだろ、というと、電車が揺れたのだから、自分は悪くない、文句があるなら運転手や電車にいえ、というのだ。

さて、こういうやつはどうしたらいいのかね。どうしようもないのである。かれは、謝罪することは、ひたすら自尊心の敗北だ、とと思っているのである。謝るにしても、ふてくされているのである。なんだ、その謝り方は、とでもいおうものなら、いま謝ったではないか（謝罪の形式に則ったではないか）、それ以上何をしつこくいうのだと、ここで「逆ギレ」というものが出てきたのである。謝罪になっていないと詰め寄られると、もう自尊心の取引（貸し借り）は終わったではないか、それ以上何を要求しているのだと、今度は自分の自尊心が許さないのである。

#### ・テレビの影響

わたしたちはテレビから、流行やお笑いやグルメや新製品といった世俗の「現在性」も受け取るのである。じつはこちらのほうが、「犯罪」なんかより、自分の日常に直結しているため、影響は多大である。いつのまにか日本人は、ハイタッチをし、親指を立て、ハグをし、めっちゃといい、元気をもらったといい、人に「受けて」おもしろい人間と思われなければだめなのだ、と思うようになったのである。

テレビが提供する「現在性」を知っていたり、やってみたりすることが自己証明となり、これについていけない者は時代遅れなのかと不安になる。これに従う者が大勢になると、自分もその一員となり、「人並み」ということで安堵するのであろう。

#### ・三つの言葉だけで会話する人たち

実のない上すべりの間投詞だけを使ったり（使うのが悪いわけではない）、「マジ?」「やべえ」「かわいい」の三語だけで関係をやり過ごしてきた人間に、まともな「コミュニケーション能力」など涵養されるはずがないのである。

#### ・芝居がかった家族

年収一二〇万円の非正規社員たちは結婚さえできない、といわれる今日、結婚して、子ど

ももできて、ちゃんとした家族をつくっていることは、それだけで勝ち組という意識もあり  
そうで、どうにも「これ見よがしの家族」とか「家族ごっこ」というふうに見えてしかたが  
ないのである。「生まれてきてくれてありがとう」も「産んでくれてありがとう」も「おまえ  
はおれの誇りだ」もおなじである。みんな芝居がかっているのだ。

#### ・自己承認

自分が納得しない仕事ならほめられても喜ばず、自分が納得した仕事なら、  
他人から批判されても自信を失わない、というふうに見えるなら文句はない。自分のことは  
自分で承認し、自分のことは自分で批判する。これが**自己承認**である。

・・・

桑田真澄は、このように思っていたのである。

成績が悪くて、マスコミにもVを逸した最大の責任者、A級戦犯だなんて書かれて叩  
かれたのに、僕自身は「自分はよくやったな」と思っていた。これは自分を甘やかして  
いるのではなくて、**本当に努力した自分を知っているからだ**。

(桑田真澄『試練が人を磨く ― 桑田真澄という生き方』扶桑社文庫)

どんなこともけっして他人のせいにはしない。すべて自分の責任だと引き受ける。しかし苦  
しさのあまり、「あいつがエラーしたから、負けたんだよ。オレの責任じゃないよ」と、「そ  
の方が楽かなと思って、やってみた年もある」。このあとがいかにも桑田らしい。「でもちっ  
とも楽しなかった。全然自分で責任を持たずに、他人のせいにばかりしたら楽だろうな  
思っただけけれど、実際にはそうではなかった。逆に、自分がちっぽけな人間に見えて、情  
けなくなった。これではちっとも人間力が磨けない」(前掲書)。

#### ・自分にとって都合の良い合理化

受刑者のほとんどは、自己の非を認めるということに過剰とも言える抵抗を持ち、日  
常の中でも素直に**過ちを認めることはありません**。常に自分にとって都合の良い合理化  
と、**他罰意識**を働かせています。

合理化の例としては、被害者がいた、向かってきた、抵抗した、最初は殺す気はなか  
ったのに被害者の言動により殺してしまった、獄に長くいることになり自分の方が被害  
者だ、被害者に対して怒りと憎しみを持つ、被害者を罵り、自分の行為については評価  
しない……ということになります。

(美達大和『死刑絶対肯定論 ― 無期懲役囚の主張』新潮新書)

#### ・ポジティブ・シンキング

自分の弱さを認めることはいっさい許されない。弱さを認めることば、自分は負け犬であると告白するよ  
うなものだからである。ポジティブ・シンキングは「容赦なく個人の責任を強調」し、これができない者は「努  
力が不十分」「成功への確信が不十分」とされる。だから、敗北も認めない。**弱くても強い、まちがって  
いても正しい、正しいから謝罪はしない**。これは国民的体質のようでもある。なるほど、これでは弱い  
人間や内省的な人間にはきつい。

ポジティブ・シンキングを販売員に植えつけることで「他のどこよりも熱心」な会社とし  
て例に挙げられているのが**アムウェイ社**である。新入社員はカセットテープや書籍の購入を  
強いられ、セミナーや集会に自腹で参加させられる。参加しない者は「ネガティブ」な人間  
として社内で無視される。集会は大音量のロックコンサートみたいで、全員が立ち上がり、  
シュプレヒコールをあげ、叫び、踊りまくるらしい。かつて同社の販売員は、ナポレオン・  
ヒルの『思考は現実化する』などの自己啓発本を毎月一冊買わされたという。現在、かれら  
は自費でセミナーに参加し、「神はポジティブ、悪魔はネガティブ」と教え込まれるらしい。  
これがアメリカ流のポジティブ思考なのだ。